

2011 年

5 月 22 日（日曜日） 乗ってつなごう 未来の子どもたちへ - みんなで KTR を考える住民参加シンポジウム -

本日、「みんなで KTR を考える住民参加シンポジウム」が 600 人にもものぼる京丹後市住民はじめ沿線等住民の皆さん、関係者の皆さんのご参加をいただき、賑やかかつ真剣な雰囲気の中で開催されました。

さて、KTR、北近畿タンゴ鉄道は、昭和 50 年代の国鉄再建の問題に端を発しながら、平成 2 年、地域の願いを乗せて、KTR 宮津線の開業をみたわけですが、国鉄時代を含め爾来、KTR は、私たちにとってなくてはならない、かけがえのない鉄道として地域に大いなる貢献を果たしてくれています。高齢化が進む中で通勤通学など地域の大切な足としてはもちろん、京阪神との間を結ぶ大動脈の一環として、地域の観光や様々な産業の維持発展、地域全体を支える財産としてどうしても欠かすことはできません。

他方で、KTR をとりまく現況は、マイカー社会の進展、近年の高速道の無料化、人口減少など各種の影響により、平成 5 年のピーク時には約 300 万人の利用があったものの、現在では 200 万人前後まで落ち込んできており、赤字の額も平成 21 年度は 7 億円を超える状況も出てきています。

このような中、KTR のあり方、支援のあり方を考えていこうということで、先般、鉄道関係者、有識者、行政関係者等からなる京都府の検討会が立ち上がったところであり、厳しい経営環境の中で、これからの経営をどうしていくか、検討が始まったところでもあります。

そこでは、もちろん経営の改善について構造的な在りようも含めて検討していくことが求められるわけですが、私は、その前に前提として大切に思いますのは、まずは改めて KTR の大切な役割を再認識すること、そして広く住民の皆で共有していくことの大切さであります。というのも、KTR は地域の生活や産業を支えるものでありますが、同時に、いくら高速道ができたとしても道路が鉄道の機能を総て代替できるものではなく、道路と共に鉄道があるからこそ初めて、より多くの人々が住むことができる或いは住む気を惹きつけることができることとなり、また、企業や病院などの法人・組織も一層定着していただくことができることとなり、更には、防災も含めて安心や安全を支えるセーフティネットを形成できることとなる、社会のなくてはならない公器となりうるのだと思うのです。大震災後はとりわけ日本全体でエネルギー効率の高い、環境にやさしい国づくりが喫緊の国家的課題ですが、鉄道のエネルギー効率、CO2 の排出抑制は、車より格段に効率的なわけで、我が国全体のエネルギー政策の面からも国策として鉄道をもっともっと支える仕組みが必要です。このように KTR は、ひとり事業としての経営の問題をはるかに越えて、社会全体の上で地域社会、コミュニティ全体を支える多く

の便益、公益を有するものであり、事業効率の問題以上に社会全体の大きな公共財であるとともに、地域の存亡を左右する私たちにとってなくてはならないパートナーであることを、私たちは今、真剣に見つめ直さなければなりません。

このことを再認識し住民皆で共有した上で大切なことは、だからこそ、住民皆で行動していくこと、週1回でも月1回でも年1回でもその人に応じて利用をさらに進めること、乗って未来に確実につないでいくことだと思います。本日のパネルのテーマのように“KTRに何を望むか”ではなくて“KTRに私たちが何ができるか”こそが大切であります。今こそ、丹後と但馬のまちづくりを、20年後、50年後の未来の子どもたち、孫たちへと継承していくために、KTRに個人として、地域として、何ができるのか、真剣に考える一日とし、行動に移していくきっかけとなる一日としていただきたいと願っています。

20年前、KTR開業に寄せて、「自分たちの鉄道は自分たちで守る」をスローガンに運動が展開されたとお伺いします。当時の関係者、住民の皆さんに心から敬意を申し上げますとともに、今改めて、かけがえのないKTRを未来に確実につないでいくため、皆で「乗ってつなぐ」運動を今日から始めましょう。京都府、兵庫県、KTR当局、沿線自治体はじめ関係者の皆さんの日頃のご尽力に心から感謝するとともに、KTRと地域の末永い発展を心から祈っています。